

下関市川棚温泉交流センター

正会員 隈 研 吾 君

川棚温泉は、下関より北約 25km に位置する山裾の静かな温泉地で、古くは山頭火やコクトーに深く愛された土地でもある。川棚温泉交流センターは、この温泉街を活性化させる期待を担って計画され、主要な機能は民族資料館と多目的ホールである。プロポーザル時に設計者から提案されたコンセプトは、地元の自然素材（土）を生かした建築、住民参加型で建物を作り上げること、および新しい空間と近隣に潜在していたネットワークがリンクすることの3つの柱からなる。

設計は、計画されていた整形な建設地を、駐車場位置を変更することで、あえて不整形な建設地に変更することからスタートした。これにより隣接する広場と音楽ホールの一体感が生まれるとともに、中央が括れた不整形な平面形状が、資料館とホールの2つの主要機能が分節されながらもゆるやかに連続する空間構成に繋がっている。

建物形状は、屋根とも壁とも言えない大小様々な三角形が互いに支え合う形で構成され、水平面も垂直面も持たないことで、周囲の山々に溶け込んだ有機的なシルエットが創出されている。様々な傾斜勾配をもつ多面体による複雑な陰影と、各面での微妙に異なる色の塗り分けにより、時刻により、あるいは天候により多彩な表情を見せる。地元の自然素材（土）を生かした建築が見事に具現化されている。またこの屋根（壁）面の形状は音楽ホールのフラッターエコー防止にも寄与している。内部に柱のない大空間は、鉄骨造のシングルレイヤトラスにより支えられている。複雑な屋根（壁）面形状と建設費抑制のため、採用された構造部材もジョイントディテールも様々であるが、そのことが却って無機質感のあるシステムトラスにはない手作り感を表現している。

人々が地方の観光地に求める魅力は、その土地特有の自然、風景、歴史、文化に触れることであり、流行の B 級グルメだけで観光客を長期間惹き付けることはできない。日本全国どこにも存在するコンビニやファーストフードのチェーン店同様に、ビルディングタイプの画一的な建築群が地方の魅力減退に荷担している例も多い。それに対して本建物は、周辺の風景に溶け込みながらも、人々を惹き付けるに十分な魅力を有しており、おそらくはこの温泉街活性化の一翼を担うこととなるであろう。「地域の歴史や風土に根ざした建築」のキャッチフレーズは無闇に乱用されているが、本建築こそ、それに相応しい。

なおこのプロジェクトの実現には、地域住民の新しい建築を核とした地域再生への情熱が大きな役割を担ったことは間違いない。住民の情熱と建築家の情熱による理想的なコラボレーションがプロジェクトの成功に繋がった希少な例と言えよう。

以上のように本建物は、地域環境への適合性、外部・内部空間における造形の独創性などの面で、特に優れているものと考えられる。

よって、ここに日本建築学会作品選奨を贈るものである。